めっこ清水

作：清野　和也

◎登場人物

サミー・デイフナシスJr.
オーティス・フナング
フナキング・J・B

現代ではない時代。福島市笹谷の「片目清水」と呼ばれる清水の中で、若い二匹の鮒、サミーとオーティスが話している。

サミー　馬鹿なこと考えんじゃねえよ、オーティス！オレと海に出るって約束は、
オーティス　それサミーが勝手に言ってただけだろ
サミー　この清水をずーっと下って行けば海につくんだよ。お前だって良いなあって
オーティス　思ってなかったよ。ずっとボクは「めっこ様」になりたかったんだ
サミー　嘘言うなよ！
オーティス　嘘じゃない
サミー　めっこ様って、お前、解ってんのか、本気かよ？
オーティス　解ってるよ！この清水に住んでるフナ達はみんな、
サミー　はあ！？　お前、
オーティス　むしろサミーだけだよ、ちゃんと解ってないのは！
サミー　だって、めっこになるんだぞ、
オーティス　めっこ「様」。めっこ様になって、
サミー　片目を失うんだ。片方の目が見えなくなるんだ！　あの、めっこ岩に自分から体当たりして、目を…！
オーティス　やっぱり解ってない。失うんじゃない、ヒトガミサマに捧げるんだ
サミー　失うんだ！目、見えなくなるんだぞ！！お前、本当にそんなことしたいのかよ！？

オーティス　そんな単純なことじゃない。めっこ様になるってことは、この清水の守り神になるってこと！　家族も誰もかれもを守れる存在になるってこと！

サミー　オーティス！絶対にやめろ！

オーティス　…そう言ってさ、サミーがなるんだろ、結局

サミー　は？

オーティス　ボクだって本当はサミーがなるべきだと思ってるよ

サミー　だから、オレは

オーティス　この清水のフナの中で誰よりも勇気があるし、誰よりも泳ぐの早いし、なんだかんだで友達思いだし、サミーがなるべきだってみんな言ってる

サミー　ならねえって。オレは海に出るんだ。海は、オレの父ちゃんですらボロボロになったんだぞ！　そのときにめっこじゃ

オーティス　絶対にならないんだね

サミー　ああ、絶対だ！！

オーティス　それじゃあ、ボクがなる

サミー　なんでそうなるんだって！オレは一番お前になってほしくないの！

オーティス　じゃあ、誰がなるの？　明日には次のめっこ様、決めなきゃいけないんだよ

サミー　…だから、最初に言っただろ。誰もなることねえんじゃないかって、めっこになんか

オーティス　本気？

サミー　冷静に考えてみろって！

オーティス　ずっと冷静だよ、こっちは！！海に行こうだなんて夢物語語ってるサミーのほうがよっぽど、

サミー　お前！！バカにすんじゃねえ！オレの夢は、

オーティス　父ちゃんの夢だろ、知ってるよ。だとしたら、親子揃って大馬鹿フナだ！！

サミー　お前！！

現在のめっこ様のフナキングが出てきて

フナキング　フフフフ…

サミー&オーティス　　フナキング様！
フナキング　争いの声がした、争いの声がしたゾ。清らかな湧き水の里に住まうフナたちが不仲（ふなか）は良くないゾ
オーティス　ごめんなさい、フナキング様
フナキング　言うてみ
サミー　いえ、なにも、
フナキング　言うてみ。なにごとも腹をかっさばいて話すことだよ。仰（おッ）しゃれ
オーティス　ボクがサミーのことバカにしたんです、だから、
サミー　いいやオーティスがめっこ様になろうって言うから止めたんです
オーティス　サミー！
フナキング　サミー。めっこ様になるのが怖いか？
サミー　恐くはありません。ただ…めっこ様になんの意味があるのかは解りません
オーティス　ごめんなさいフナキング様、
サミー　邪魔すんな。オーティスがなんの意味もないことの為に片目を失おうって言うんなら、友人としてオレは止める、それだけだ
フナキング　サミー、それは、私がめっこ様だって解って言ってるんだね？
オーティス　サミーは今ちょっと感情的になってて、
サミー　はい、そうです
オーティス　サミー！！
フナキング　良いんだヨ、オーティス。サミー、君は本当に父親に似ている
サミー　父ちゃんに、
フナキング　良いかい、サミー、聞くんだ。この清水にめっこ様が生まれたのは、はるか古（いにしえ）のこと。あるヒトガミサマによってもたらされた恵みとともに…オーティス、
オーティス　カマクラノカゲマサ様です
フナキング　そう。ヒトガミサマのクニ、ムツ・デワノクニで起こったヒトガミサマ同士の戦い・ゴサンネンカッセン。カゲマサ様は、御年一六歳、まだまだ若かったが、敵がヒョーッと射た弓矢が、
サミー　何十回も聞いてます。カゲマサ様の目ン玉に突き刺さったんでしょ

フナキング　そうだ。勇敢なるカゲマサ様は、臆すること無く目に矢が刺さったまま、敵を追いかけ討ち果たした。その後（のち）、この清水に辿り着き眼（まなこ）を洗えば不思議なことに、たちどころに傷は癒え、再び光が見えるようになった。それ以降、この清水に住むフナたちは、不思議とどれも片目で生まれてくるようになった。

サミー　片目で生まれてくるフナなんて、この清水にとんと出ていないじゃないですか

オーティス　だからそれはヒトガミサマが情けをかけてくれたんだって教わっただろ。みんなが両目で暮らせるようにしてくださった

サミー　だけど一匹だけは、その目をヒトガミサマに捧げる必要がある

フナキング　それが、めっこ様だ。ヒトガミサマに片目を捧げることが出来る、これはとても名誉なことだヨ

サミー　解んない

オーティス　サミー。もうやめときなって

サミー　やめないね。フナキング様、オレはこんなバカなことやめたほうが良いと思ってる

フナキング　どうしてだい

サミー　意味が無いと思うから

オーティス　サミー！ ここに湧き出る水だってヒトガミサマがいるから湧いてるんだって

フナキング　この清水は、ヒトガミサマ達の目の病を癒やす水になったんだヨ。だからいつでも美しい水が湧き出ている

サミー　…その話は本当なんですか？

フナキング　そう伝わっている。何十年も何百年も

サミー　…オレの父ちゃんは「海」を見に行った

フナキング　そうだね。私は止めきれなかった。悪いことをした

サミー　どうして悪いことなんです

フナキング　「海」の水はここと違って毒なんだ。ヒトガミサマの水ではないからね

サミー　フナキング様。オレ、父ちゃんがフナキング様のこと…、JBさんのこと、

誰よりも信じてたって聞いてます。…親父は最期にオレになにか言おうとした、「ヒトガミサマは」って。海に行って何かを知ったんだ。JBさんは、親父から海の話なにか聞いてないんですか？

フナキング　…勇敢なるフナの息子サミーよ。私はね、お前にめっこ様になってほしい。

サミー　・・・

フナキング　明日がその日だ。私はお前を指名する。良いね。そのときにお前の父親の話のすべてを教えよう。良いね

サミー　・・・

フナキング去る

オーティス　…そうだよね

サミー　オーティス。…オレならねえよ、絶対に

オーティス　じゃあなんでフナキング様の前で言わなかったの？

サミー　それは、父ちゃんのことなんて出すから。でも、

オーティス　フナキング様とサミーのお父さんって友達だったんだ

サミー　ああ、そうだ、だけど、

オーティス　…ああ良かった。ほんとうはボク、怖かったんだ

サミー　オーティス、

オーティス　ボクは臆病者だからさ。あのめっこ岩に向かって自分からだよ、向かっていかなきゃいけないんだ。目をカッと開いて。自分で目を潰すんだ。どれだけ痛いんだろうって思ってた、

サミー　そうか…そうだよな、良かった。オーティスがそうならなくて

オーティス　サミーは怖くないんだもんね

サミー　だから、オレは

オーティス　サミー

サミー　なんだよ

オーティス　ボクがどうしてめっこ様になりたかったと思う

サミー　そりゃ、お前、この清水のフナたちのためって

オーティス　違う。知ってるだろ。めっこ様はほかのフナたちよりも、たくさんご飯が食べられる。その家族もだ。そのためだよ

サミー　お前、

オーティス　サミーには解らないだろうね。フナキング様とお父さんが仲良しだったんだもんね、不自由なく暮らしてたんだよね。だから、めっこ様になんてならなくたって良いんだ

サミー　フナキング様はそんなこと

オーティス　ボクの妹、神隠しにあってるだろ。ボクはそのときに目の前にいた

サミー　目の前に？

オーティス　…聞いて。母さんからもフナキング様からも、絶対に言うなって言われてた。だけど…

サミー　オーティス、無理していうことないんだ

オーティス　聞いてって！あれはヒトガミサマの遊びだったんだと思う

サミー　遊びって、どういうことだよ

オーティス　ミミズがさ、急に落ちてきたんだ。お腹が空いていた妹はボクが止める間もなくそれに喰らいついた。そうしたら、妹はどんどん天に引っ張られていったんだ。妹の口から鋭い針が見えた。ミミズに針を隠してたんだ。妹は痛がりながら、ボクに助けを求めながら、天に引っ張られていった。ヒトガミサマが妹を奪ったんだ

サミー　…カミカクシはヒトガミサマに選ばれた名誉なことだって

オーティス　こういうときだけ、言い伝えを持ち出すんだね。サミーは。きっと遊びだよ。妹がどうなったかは解らないけど、二度とは戻ってこなかった。

サミー　でも、

オーティス　ヒトガミサマはいるんだ、サミー。だけど、決してそれは恵みをもたらしてくれるものじゃない

サミー　それじゃあなおさら、どうしてめっこ様になんか

オーティス　…言っただろ。ほかのフナたちよりも豊かな暮らしが出来るからだよ

サミー　違う。お前はそんな奴じゃない

オーティス　やめて！そうなんだって！だってヒトガミサマが良いものじゃないなら、

幸せは自分でつかむしかないんだ！

フナキングが駆け込んできて

フナキング　お前たち、隠れるんだ！！

オーティス　フナキング様！？

フナキング　ヒトガミサマがお怒りだ。次々にフナたちが天に掬われていく！

サミー　隠れるってどこに！

フナキング　その岩の裏陰ならあの網も届かないだろう！

オーティス　フナキング様も入れます！さあ

フナキング　ならん。いいか、これから私も天に登る！ヒトガミサマにこの目を見せる。

サミー　それを見せてどうなるんだよ！

オーティス　フナキング様、ボクら解ってます！ヒトガミサマが恐ろしいものだって！

フナキング　だから一緒に岩の陰に

だったらなおのこと逃げられんよ。それが大人だ。…ヒトガミサマは話が解らぬものばかりではない。そのための失った片目よ！

サミー　待ってよ、フナキング様！

フナキング　…サミー、親父さんからの伝言だ。伝えなきゃいけないって解ってたんだが。聞け、海ってのは、ここよりもとんでもなく広い場所なんだそうだ。とてもヒトガミサマが作ったとは思えないと。親父さんの体はどうしてか耐えられなかったけど、懐かしい感じもしたそうだ

オーティス　フナキング様！

フナキング　そしてな、ヒトガミサマが海にもがき苦しみながら落ちていくのを見たんだって。ヒトガミサマよりも偉大な存在が海なのかもしれないって思ったそうだ。嘘か本当か解らない…ヨ。…お前達、動くな。隠れていろ。良いな。暫く！暫く！ヒトガミサマよ、このめっこのフナを捕えよ！

フナキング捕らえられる

サミー　ああああ、フナキング様！！
オーティス　サミー！
サミー　うあああああ！！

岩陰にも網を入れられる。サミーも捕まりそうになる。オーティスがサミーを突き飛ばし、オーティスが連れていかれる。しかし、サミーはめっこ岩の鋭い場所にたたきつけられ、片目を傷めてしまう。

サミー　ああ・・・ああ、オーティス！！オーティス！！フナキング様！！みんな、みんなああ！　…ああ、ヒトガミサマ！！　ヒトガミサマ！！　オレも連れてってくれ・・・。頼むから、頼むから！！なあ、そうして、ほら、見てくれれよ、この目。潰れちまって、片目になって、ヒトガミサマに捧げたんだ。カゲマサ様に捧げた目だ…だから、どうだ、なあ！！

溶暗。しばらくしてオーティスがサミーを呼ぶ声が聞こえる

オーティス　サミー…。サミー！？
サミー　オーティス…！オーティス！！良かった、良かった…怪我はないか！？みんな無事か
オーティス　ボクは大丈夫。みんなも、ただ…
サミー　…フナキング様は？
オーティス　…ボク達、小さな壁の中に閉じ込められたんだ。この清水のフナたちが何匹も何匹もいた
サミー　なあ、フナキング様は
オーティス　必死に叫んでくれた、フナキング様が
フナキング　ヒトガミサマ！お忘れですか。この片目はヒトガミサマに捧げたものです。これで足りぬとおっしゃるならば、ちっぽけな命ですが、このめっこの命も捧げましょうぞ。どうか怒りを納めてくだされ。どうか、他のモノの命を奪うことはなされますな！

オーティス　ヒトガミサマの巨大なヒレ…ヒレなのかな…解らないけれど、フナキング様を天に攫って行ったんだ。そうして気づいたら皆、清水に帰ってきてた

サミー　…フナキング様が戻ってくることを祈ろう

オーティス　誰に祈ればいいんだろう

サミー　…海に

オーティス　…ねえ、サミー。フナキング様は全部解ってたんだろうね

サミー　ああ、

オーティス　ボクらを守るためにヒトガミサマに命を捧げたんだ。…ここが…カゲマサ様の神聖な場所がここだって。ヒトガミサマ達に思い出させるんだ。

サミー　…なあ、「めっこ様」って、ヒトガミサマから、オレ達この清水のフナたちを守るために生み出された物語だったんじゃないか？

オーティス　めっこ様は必要なんだ、この清水を守るためには。またボクらは気紛れに天に掬われるかもしれない。明日、ボクが、次のめっこ様になる。良いだろ

サミー　いや、オレがなるよ

オーティス　だって、

サミー　…ほら、この目。こんな目じゃ海になんか行けないしな

オーティス　サミー、それ、ボクが、

サミー　…良いんだ。きっとこれが運命だから。オレで終わりにしたい、めっこ様を。どうすりゃいいか解らないけど

オーティス　…海、

サミー　海？

オーティス　ヒトガミサマより偉大な海に移り住めばいいんだよ

サミー　そんなこと…、みんな移ってくれないだろ。この清水だって、ヒトガミサマが創ったって信じてるんだ

オーティス　信じていたことが「間違い」なことなんてたくさんある。未来は続くんだ。今しかない。サミーとボクが気づいた今が未来のはじまりだよ。…ねえ、サミー。この清水をずっと下って行けば、「海」に繋がるんだね

サミー　ああ、親父は辿り着いたんだって。だけど、危ないんだって、親父にも

オーティス　サミー、ボク行くよ。行って、見てくる。

サミー　本気なんだな

オーティス　うん。そうして真実をみんなに伝えるから。どうか、家族を頼めないか

サミー　…オーティス。もちろんだ

オーティス　良かった。それじゃ、サミー。ありがとう。行ってくるね！

サミー　すぐ行くのか。

オーティス　真実に向かって、いっときだって留まっちゃならないから

サミー　そうか。それじゃあ、行ってこい。…さあ、ヒトガミサマ。この清水のフナたちは、お前らの思い通りにはならないぞ。オレ達全員で真実を知るまで生き抜いてやる、生き抜いてやる。

オーティス、サミー去る。

現在も片目清水と呼ばれる清水には、今もコンコンと清水が湧き出ている。しかしそこに伝えられているような片目のフナは一匹もいない。それどころか、フナの姿はただの一匹すら見えない。

劇終。